

文法研究の現状と展望*

鄭相哲**

〈Abstract〉

Current trends and prospects of studies on Japanese grammar

This paper examines research articles on Japanese grammar, which have been published in academic journals in 2015 and 2016 in Korea, and explores their current trends, clarifies their special features, and provides a prospect of future studies on Japanese grammar.

In this period, the trending special features are (i) a decrease in the number of grammar researches, (ii) a decrease in theoretical researches and an increase in descriptive researches, (iii) an increase in corpus researches, (iv) vigorousness of language typological contrastive researches and (v) diversification of researches on grammar.

The paper further points out some issues that require greater attention, such as establishment of a holistically interrelated research stance with 'general linguistics' and 'Japanese linguistics', exploration of a more scientific research methodology, reconsideration of fundamental and essential research items, reinforcement of the connection between research on grammar and educational sites, and expansion of the actual intellectual exchange.

Field : Syntax, Morphology

Keywords : Trends in grammar research, Decrease in grammar researches, Increase in corpus/descriptive researches, Diversification, Typological contrastive research

1. はじめに

2000年代に入ってから一般言語学、特に言語類型論の方で画期的な業績の一つはWALS(world atlas of language structures : <http://wals.info>)であろう。Beard S, Comrieを中心として国際的な大勢の研究者が長期間にわたり、多くの言語を対象とした共同研究の成果である。現在は誰もが簡単にアクセス可能であり、最新情報もアップデートされ続けている。さらに、今後は言語類型論と歴史比較言語学との関連の追求に多くの研究者の関心が集まっている。

また、日本語学で伝統的な文法研究は「陳述論争」ということから分かるように、文法研究の出発点として文成立論というか、文とは何か、ということから始まる場合が多かったと思う。それは文法

* This work was supported by Hankuk University of Foreign Studies Research Fund Of 2017.

** 韓国外国語大学校 教授

の科学的で体系的な記述を目指す伝統的なやり方であると思う。しかし、最近はこのような研究よりも「語法的研究」というか「形態素主義的」な研究が多く見られるようになった。また、一時期「教育文法」という用語が盛んであったが、最近はあまり聞かなくなった。野田尚史(2012)の言うように文法研究の「多様(角)化」または安定した「沈滞期」に入っているような気がする。

一方、李康民(2012)などによると、韓国における日本語研究は2000年代に入り、この分野で1年に二千編位の論文が公刊されるようになったという。そしてその中で文法研究は研究者の数も圧倒的に多く今まで中心領域の分野であった。しかし、今期(2015年から2016年まで)になってからその中心領域に少しづつ変化が見られるようになった。この点を含めて今期韓国における日本語研究、特に文法分野で見られる全般的な特徴は概略次のような点が指摘できると思う。

- 1) 文法研究の減少
- 2) 記述的研究の増加
- 3) コーパス利用研究の増加
- 4) 対照研究と言語類型論
- 5) 多様(多角)的な研究

以下では上の傾向について順に述べていくことにするが、筆者の能力不足と紙幅の関係上、すべての論文を取り上げることができず、上の傾向に符合する極めて限られた論文を言及するしかない。

2. 文法研究の減少

今回対象としているのは2015-16年に韓国の学術雑誌17種で発表された論文が中心である。次の〈表1〉は学術誌別の論文総数と文法論文数を示したものである¹⁾。

〈表1²⁾〉「文法論文数」

	論文総数	文法論文数
A	238	56
B	131	12
C	73	18
D	136	13
E	141	24
F	133	13

- 1) 文法論文であるか否かは研究者によって判断が異なる場合が予想される。しかし、ここでは正確な数値より全体的な傾向の指摘で十分であると思われるので、これ以上深入りしないことにする。
- 2) Aは『日語日文学研究』、Bは『日本学報』、Cは『日本語学研究』、Dは『日本文化学報』、Eは『日本語文学』(日本語学会)、Fは『日本語文学』(韓国日本語学会)、Gは『日本文化研究』、Hは『日本語教育研究』、Iは『日語教育研究』、Jは『日語日文学』、Kは『日本言語文化』、Lは『日本近代学術研究』、Mは『日本研究』(韓国外国語大学)、Nは『日本研究』(高麗大学)、Oは『日本研究』(中央大学)、Pは『比較日本学』、Qは『日本学研究』である。

G	134	12
H	90	9
I	81	12
J	155	17
K	142	19
L	180	12
M	91	4
N	48	2
O	79	16
P	81	7
Q	104	10
合計	2037	256

上の〈表1〉から分かるように計量的な観点から考えると、全体の研究の中で今期の文法研究が占める比率は12.6%である。李(2012)の調査によると、全体日本関連論文の中で文法論文が占める比率が2000-2006年では35%であり、2007-2010年では31.2%であるという³⁾。この数字に比べると今期の一つの特徴は文法論文数の減少であると言えよう。

その一因は日本語教育という分野の成長とも関連すると考えられる。「日本語教育」として特化された学会と学術雑誌も二つもあり⁴⁾、国内の日本人研究者も毎年増加している傾向にある⁵⁾。これは、日本語教育という研究分野が細分化され、底辺も拡大されつつある事実とも関連するであろう⁶⁾。

また、具体的な論文名などは取り上げられないが、教育現場に近くにいた文法研究者が日本語教育の方へと専門分野を変更してしまったことの影響もあろう。

3. 対照研究と言語類型論

李徳泳(2016)によると、対照研究とは、「方法的に、同時代における二つ以上の言語を照らし合わせ、その類似点・相違点を明確にする言語研究のことで、それを通じて分析対象となる言語への理解を深めることを目的とする」ものであるという。今期これに相当する韓国語と日本語とを対照した研究が引き続き盛んに議論され、次のような論考が見られる。

- ・張根寿「推測を表す副詞に関する日韓対照研究」『日本語教育研究』35
- ・李才銀・尹相実「日韓心理動詞述語文の対応関係分析」『日語日文学研究』96
- ・小木直美「日本語と韓国語の人称詞分布に関する一考察」『日本語学研究』48

3) 一方、權奇洙(2015)は1993年から2013年までの『日語日文学』という雑誌を調査したものであるが、日本語学の中で文法論文(統語論と形態論)が86.1%であるという。しかし、対象とした雑誌が一つだけで信頼性と代表性の問題もあるのでここでは参考にとどめる。

4) 韓国日本語教育学会と韓国日本語教育学会である。

5) これは各大学から日本人をはじめ、原語民先生にも昇進や昇給のため研究業績を求めている事実と無関係ではない。

6) さらに、日本語教育の動向については金榮敏(2015)、李美淑(2013)なども参照。

- ・金庚洙「時間関係節に見られる日本語と韓国語の様相」『日本学報』103
- ・羅聖榮「日韓帰結表現の対照的な考察」『日本語文学』69

しかしながら、この期間の特徴の一つとして、韓国日語日文学会(2015.4.18.)が「言語類型論と東アジアの個別言語研究」というテーマで開催した国際シンポジウムが注目される。次はその結果が論文として発表されたものである。

「言語類型論と東アジアの個別言語研究」

- ・朴鎮浩「言語類型論が韓国語文法研究に提示するもの」
- ・朴正九「言語類型論的な観点から見た中国語の類型論的变化と文法体系の発展」
- ・鄭相哲「言語類型論と個別言語研究」(以上、『日語日文学研究』94)

このシンポジウムの趣旨は韓国語、中国語、日本語という個別言語をより深く研究するためには世界の言語の特徴をも参考に「言語類型論」的な観点が必要である、ということであろう。もっともこの種の観点は個別言語研究だけではなく、対照研究においても同様である。このような立場から個人が行った研究としては次のようなものがある。

- ・朴江訓「言語類型論的な観点から見た韓日両言語の否定命令文の研究」『日本語文学』69
- ・王晓華「「らしい」の承接について」『日本語学研究』50

このような観点は言語研究だけに適用されるものではなく、文学、文化、政治、経済など科学的な研究一般に通じるものなのかも知れない。今後このような研究スタンスがどういふふうに進んでいくのか、注目する必要がある。今期の対象の研究ではないが、上のようなスタンスで日本で行われた次のような研究が今後日韓対照研究または文法研究にも非常に参考になると思われる。

- ・工藤真由美編(2004)『日本語のAspect・Tense・Mood体系-標準語研究を越えて-』ひつじ書房
- _____ (2007)『日本語形容詞の文法』ひつじ書房
- ・八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究』明治書院

このような研究の長所は日本語の文法研究に取り込む時、常に一般言語学(上では言語類型論)との関わりを考えながら日本語の独自の特徴を相対的に一般化することによって、より科学的な結果が期待できるところにある。

4. 記述文法研究の拡大

文法研究を大きく二つに分けると「記述的研究」と「理論的研究」に分けられる。記述的な文法研究を正しく理解するには次の指摘が示唆的である。

「単なる大量の用例記述のように誤解されやすいのだが、事実に正確な記述こそが妥当な原理に基づいているのだとすれば、具体体系の記述から一般文法論へと通じるその道筋を見いだしていくことが重要である。(工藤(2002:26))」

「記述文法=理論なしに事実だけを書き並べた文法」という消極的なとらえ方ではだめで、一般言語学に学びながら、文法を包括的・体系的に記述する方法論に関する議論をもっと深めていく必要があると思います。」(学会誌展望小委員会(2006:154))

また、理論的な研究という時の「理論」については立場や観点によって異なる場合が多いので⁷⁾、次の辞典的な定義が参考になる⁸⁾。

「個々の現象を法則的、統一的に説明できるように筋道を立てて組み立てられた知識の体系。」

(大辞泉)

「理論は事象を合理的に説明するための論述であり特に学問の領域において決定的な意義を持っている。理論の意義は数多く挙げることが出来るが、第一には理論は高度に複雑な現実の世界を単純化することが可能である点を挙げることができる。世界の森羅万象には人間の認知能力を遙かに超えた膨大な諸因子と関係性が関わっており、それら全てを再現することは現実的ではない。従って現実を単純化する必要が認められ、その役割を理論という思考の道具に担わせることになる。つまり現実を完全に再現することではなく、どの程度の説得力を保持した上で理解しやすく現実を原理や法則などとして単純化しているか、ということが理論の本義であると言える。

また自然現象の実験や政策提言のための調査などによって得られた知識を蓄積する上で有効な思考上の枠組みを提供することができる。しかも理論は研究において均衡の取れた総合的な視野を提供し、さらに直感的または感覚的な結論を回避して論理的な説明を行うことが可能である。これは研究調査を行う上で大きな指針である。

加えて現在の学術研究のほとんど全てが何らかの基礎的な理論に基づいたものであり、先進的な研究を理解する上で理論は学問の世界にとってもはや不可欠の存在である。また初心者にとっても理論が確立されていれば学習しやすい点も指摘できる。このように理論の存在価値は学問にとってなくてはならないものであると言える(http://ja.wikipedia.org/wiki/)

もっとも研究者によってその捉え方が必ずしも一致するわけではないが、多くの研究者が上記のような「記述的研究」と「理論的な研究」とが対立するものではなく相互補完的な関係にあるものである、という認識を持っている。

さて、この期間のもう一つの特徴としては今までもあまり盛んではなかった理論的な文法研究がさらに減少し、記述文法研究の方は少しずつ増加するようになったという点である⁹⁾。この期間中に公刊された理論的な文法研究は次のように数えられる位のものしか見られない。

- ・金栄敏「叙述の類型と日本語主語繰り上げ構文」『日本学報』108
- ・朴江訓「韓日両言語における文法化の対照研究の諸相」『日本語文学』64

7) 例えば、金水(2002)では反証可能(falsifiable)を理論や仮説の条件として考えている。

8) この定義は鄭(2010)でも引用したことがある。

9) 韓国の方での研究は朴(2016)も参照。また、理論的な研究が減少する傾向は日本で行われている文法研究においても同様のようである。2016年12月4日153回日本言語学会(福岡大学)のワークショップでも、また、同年12月10日17回日本語文法学会(神戸学院大学)のシンポジウムでも理論的な研究が取り上げられている。

- ・金秀栄「外側への移動を表す「出す」と「내다」の意味分析」『日語日文学』69

最初の論文が生成文法の立場から論じられたものであり、2番目が文法化の観点から考察したものであり、最後の方は認知言語学の枠組みを用いた論考である¹⁰⁾。日本で行われた研究との違いはいわゆる「構文文法」といわれる研究が韓国の方ではあまり見られない点である¹¹⁾。

これに対し、記述的な文法研究は枚挙にいとまがない。次は主に比較的若手の研究者達の研究であるが、一部の例として紹介できよう。

- ・裴銀貞「AハBガVである」構文の特徴分析」『日本文化学報』67
- ・李廷玉「〈変化の継続〉を表す「テイク」構文の前項動詞類」『日本語教育』73
- ・金俸呈「「はた迷惑」が伝わる受身文の構文的類型化のかのうせいについて」『日語日文学』65
- ・河在必「発話動詞「いう」の条件形用法に見られる文法化と語彙化」『日語日文学研究』93
- ・全紫蓮「副詞「まったく」の意味と機能」『日語日文学研究』94
- ・崔瑞暎「非情物主語の他動詞文について」『日本言語文化』31
- ・方允炯「名詞に接続する“そば”と“よこ”の意味と機能」『日語日文学研究』94
- ・高橋美保「思考動詞“思う”のモダル化」『日語日文学研究』94

記述的な文法研究が単に事実の羅列ではないとするなら、そこにも「抽象」と「捨象」による一般化を通じて「原理」を見いだす作業が必要になろう。これらがどれほどの価値を持つ良質の研究かという点については歴史による評価を待たなければならないが、記述的な研究が活発に行われている事実は確かである。

一方、古典文法の方は従来通り、次のように多くはないが受け継がれているように思われる。

- ・金平江「日本語否定名詞述語文に関する史的考察」『日本語学研究』46
- ・朴鐘升「「だに」「すら」「さえ」の歴史的変遷」『日本語学』70
- ・趙燭熙「『捷解新語』における副詞「懇ろ・随分・殊の外・仰山・一段・いかにも」とその対訳について」『日本学報』105
- ・李炳萬「『平家物語』の敬語、「侍り」と「候ふ」について」『日本学報』102
- ・劉相溶「形式語「ツモリ」の意味変遷」『日本学研究』48

では、次はコーパスを利用した文法研究について検討することにしよう。

5. コーパス言語学

海外では言語研究にコーパスが積極的に活用されるようになって久しい。周知のごとく日本では2011年8月国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』が公開された。同様に韓国にお

10) 2、3番目の論文は対照研究にも属するであろう。他も同様である。

11) 日本での理論文法または構文文法については学会誌展望小委員会(2010)(2013)(2016)も参照されたい。

る日本語文法研究においてもBCCWJをはじめ、小説や新聞、雑誌などのコーパスが文法研究に盛んに利用されている。次はその具体的な研究例である。

- ・金恵娟「ダブルテンス形式の観点からみた「はずだ」の研究」『日語日文学研究』93
- ・河在必「現代日本語における比較用法の「より」をめぐって」『日本語学』68
- ・朴成美「「反復性」と「習慣性」の異同について」『日語日文学研究』96
- ・李恵正「中断節における「から」「ので」の使用に関する考察」『日本語学研究』46
- ・金光成「日本語複合動詞の主観性とコロケーションに関する記述的研究」『日本語学研究』49
- ・趙恩英「類義関係にある「だんだん」「徐々に」「次第に」の 文体的特徴と 「ブログ」における使用状況について」『日本語学研究』49
- ・朴恵晟「他動詞「あける」の意味と用法の相関性についての研究」『日語日文学研究』98

しかし、既に指摘があるように「均衡」という言葉をどの程度信用できるか、という問題もある。つまり、均衡コーパスだから偏りのない客観的なデータだというあまい認識を助長する場合もあるように思われる。何を目指す研究かによってコーパスの利用目的を明確にしなければならない。

さらに、言うまでもないことであるが、コーパスを利用した研究の長所は短時間で誰もが簡単に大量のデータを得ることである。しかしながら、「discourse>syntax>morphology」という名言のように最近の文法は前後のコンテキスト、つまり談話状況を検討しなければならない場合が多い。今後多様なコーパスの開発によってこのようなニーズにも答えてくれるものが期待される。

6. 多様(多角)的な研究

伝統的な文法研究が文成立論をはじめ、中核的なカテゴリーに注目し議論してきたが、今期の場合には日本の影響なのか、多様(多角)的な研究が見られるようになったことも一つの特徴である。例えば、中心的な現象から周辺的な現象へ、談話行動、語法的な研究などがそれである。

- ・李吉鎔「日本語学習者の推量・確認要求表現の使用条件」『日本語学研究』44
- ・李恩美「韓日接触場面に現れた「なんか」のコミュニケーション機能」『日本語学研究』46
- ・申貞恩「名詞の場所性と「行く」「着く」「向かう」の関係性」『日本語学研究』48
- ・申義植「接続助詞として機能する「ところを」について」『日語日文学研究』97
- ・金周訓「会話文から見た「だろう」の働き」『日本語学』69
- ・金玉任「否定疑問文に用いられる「よ」」『比較日本学』33

既に野田尚史(2012)が指摘するように現代文法研究が言語構造重視から言語運用重視へ移行する傾向がある。これには勿論社会言語学的な研究が多く見られるようになったことがあげられる。しかし、最初の二つの論文も「日本語教育」や「談話分析」の観点から考察したもので言語運用重視に相当するものである¹²⁾。

さらに、研究者達の関心がテンス・アスペクト・モダリティ・受身・使役など文法の中心的な現象から「周辺の」「例外的」な現象に移行している傾向も見られる。三番目の論文から四つの論考がこれに相当するものだろう。また、最後の二つの論考はいわゆる「語法的な研究」の中に位置づけられると思われる。

上記のように文法研究が多様(多角)化されていく傾向を確認した。このような研究が進められることによって、「言語構造重視」や「中心的研究」に新しい可能性と示唆を与えることもあろう。従って、周辺の研究が周辺では終わらない場合がある。

7. おわりに

以上、過去2年間韓国で行われた文法研究について学術誌を対象に、すべての研究に言及するより大きな傾向を中心に検討してきた。ここでは量的な量産より良質の研究を追求しないといけない現段階から次のステップに発展するためにいくつかの基本的な問題を考えてみたい¹³⁾。

まずは研究姿勢についてである。鄭(2010)でも言及したように言語学と人文学とは「全体」と「部分」の関係にある。同じく「一般言語学」と「個別言語研究」との関係も同様であると考えられる。従って、個別言語の研究のためにも対照研究のためにも一般言語学というベースになるものが必要であり、相互関連性を確認する作業は必須である。以下は言語類型論というこのような立場から行われた研究成果の一部である。

工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房, pp.3-649

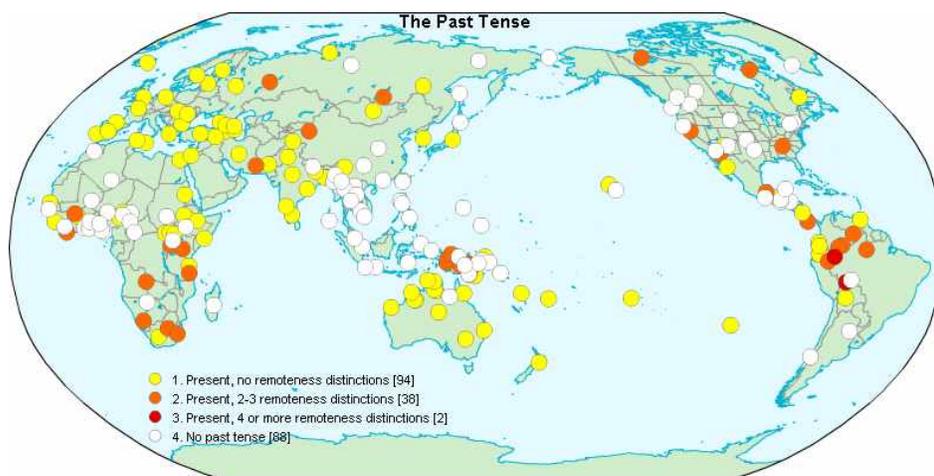
Martin Haspelmath, Matthew S. Dryer, David Gil, Bernard Comrie(eds.) 2005

The World Atlas of Language Structures, Oxford University Press

後者のWALSの一例を紹介したものが、次の<図1>である。

12) これらが文法研究に入るかどうかについては異見もあろう。

13) 朴海煥(2011)、李康民(2014)なども参照されたい。



Tense and Aspect(66:276)(Dahl & Velupillai)

〈図1〉「過去テンス」

二つ目は研究方法論についてである。言語学も「科学」であるという認識のもとで各研究者はより科学的な方法論にこだわる必要があると思われる。例えば、コーパス言語学もその一つであるが、この資料を使うのがすべての文法研究において適切ではない。研究対象によってより科学的な資料が何かを考えなければならない。また、考察対象によって「理論」と「記述」の問題を考慮しなければならない。言い換えれば、一般化の度合いを調整する必要がある。

三つ目は研究対象である。日本語文法研究において画期的な研究がしにくいという話もある。しかし、工藤(2002)によると「構文的機能が形態論的特徴に優先するとすれば、構文的機能抜きに形態論的形式の意味・機能を記述することはできないのである。」という指摘も見られる。ここで一つ考えてみなければならないのは日本語文法研究において「構文論」の内包と外延は一体何か、という問題である。思い浮かぶのは語順の研究程度であり、このように文法研究において基本的でありながら本質的な問題がまだまだ解明されていないのである。ついでに、単語とは何か、文とは何か、形態論とは何かのみならず、名付けの意味(reference)と文の対象的内容を現実と関係づける陳述性(predication)の問題も熟考しなければならない。

四つ目は教育と研究との関係である。ある意味で両者は車の両輪の関係であり、一方無しには他方が成り立たない関係であるという事実を明確に認識しなければならない。しかしながら、「文法研究」と「教育現場」との乖離がありすぎて、有機的な協力関係であるとは言えないのが現状である。両側から積極的で円滑な疎通の努力が必要であり、無意味な抽象化と単純化は避けなければならない。

五つ目は実質的な学問的な研究交流の場の問題である。既に多くの指摘があるように韓国の日本語文法研究は量的には満足できるレベルである。しかし、学問の交流の場が形式的になりすぎてあまり役に立たないのも事実である。必ずしも公式的な場である必要はないが、専門家が集まりより生産性の高い、実りの多い議論ができる交流の場が求められる。

この展望は本人には身に余る重い役割であり、不備が多々あるかと思われる。ご容赦いただければ幸いです。最後になるが、鄭(2010)でも引用した次のことを再吟味しながら本稿を終わりたい。

「だが、それでも、できるだけ誠実に真実に迫ろうという誠意は、文献学者を範として、現代語の研究者ももつべきだろう。「もう少し熟考すれば、こうした奇異なことを言うはずはあまいに」と言いたくなるような「論文」に出会うことがあるのは残念なことである。粗製濫造よりも熟考した一篇の好論を尊ぶ良識が、量産で就職を競う新しい「常識」に譲りつつあるという不幸が背後にあるにしても、である。」(菊地康人(2000:50)より)

【参考文献】

- 權奇洙(2015)「일어일문학 게재논문(1993-2013)의 주제분석」『일어일문학』 65 대한일어일문학회 pp.27-48
- 金栄敏(2015)「韓国における日本語学・日本語教育の現状と展望」『比較日本語研究センター研究年報』 11 お茶の水女子大学 pp.223-228
- 朴江訓(2016)「한국 일본어학계의 통어론 연구 현황과 과제」『日本語学』 68 한국일본어학회 pp.59-82
- 朴海換(2011)「한국의 일본어학 연구의 방향성」『일본어학연구』 32 한국일본어학회 pp.85-103
- 李康民(2012)「한국에서의 일본어학 연구」『日本学報』 91 한국일본학회 pp.1-8
- _____ (2014)「轉換期の 日本研究」『日本学報』 100 한국일본학회 pp.1-11
- 李徳泳(2016)「対照研究に関する一考察」『日本語学研究』 47 한국일본어학회 pp.91-103
- 李美淑(2013)「3.11以降の韓国の日本語教育の現状と課題」『日本学報』 97 한국일본학회 pp.55-69
- 鄭相哲(2010)「일본어문법 연구의 현황과 가능성」『일본어학연구』 28 한국일본어학회 pp.17-30
- 菊地康人(2000)「良質の記述的研究の重要性」『国語学』 200 日本語学会 pp.48-50
- 金水敏(2002)「日本語文法の歴史的研究における理論と記述」『日本語文法』 2-2 日本語文法学会 pp.81-94
- 学会誌展望小委員会(2006)「日本語文法学会の展望」『日本語文法』 6-1 日本語文法学会 pp.148-186
- _____ (2010)「日本語文法学会の展望」『日本語文法』 10-1 日本語文法学会 pp.130-163
- _____ (2013)「日本語文法学会の展望」『日本語文法』 13-1 日本語文法学会 pp.132-173
- _____ (2016)「日本語文法学会の展望」『日本語文法』 16-1 日本語文法学会 pp.130-169
- 工藤真由美(2002)「文法(理論・現代)」『国語学』 53-4 日本語学会 pp.22-29
- _____ (2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房 pp.3-649
- _____ 編(2004)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系-標準語研究を越えて-』ひつじ書房 pp.3-145
- _____ 編(2007)『日本語形容詞の文法』ひつじ書房 pp.1-125
- 野田春美(2012)「文法(理論・現代)」『日本語の研究』 8-3 日本語学会 pp.26-33
- 野田尚史(2004)「文法(理論・現代)」『国語学』 55-3 日本語学会 pp.26-33
- _____ (2005)「これからの文法論の焦点」『日本語学』 24-4 明治書院 pp.16-27
- _____ (2012)「総説」『日本語の研究』 8-3 日本語学会 pp.1-4
- 前田直子(2014)「文法(理論・現代)」『日本語の研究』 10-3 日本語学会 pp.25-32
- 宮崎和人(2010)「文法(理論・現代)」『日本語の研究』 6-3 日本語学会 pp.25-33
- 八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究』明治書院 pp.1-248

〈요지〉

문법 연구의 현황과 전망

본고는 2015-6년도에 한국에서 발간된 학술지를 대상으로 하여 문법연구의 동향을 살펴보고 그 특징을 파악하고 또한 금후 전개될 문법연구의 전망을 한 것이다.

먼저 이 시기의 문법연구의 특징적인 경향으로는 1)문법연구의 수적 감소 2)이론적 연구의 감소와 기술적 연구의 증가 3)코퍼스 연구의 증가 4)언어유형론적인 대조연구 5)문법연구의 다양(다각)화 등을 지적하였다.

또한 금후의 과제로는 「일반언어학」 과 「일본어학」 과의 유기적인 연구스탠스 확보, 보다 과학적인 연구방법론의 모색, 기본적으로 본질적인 연구대상의 제고, 문법연구와 교육 현장과의 연계강화, 실리적인 학문교류 확대 등을 지적하였다.

논문분야 : 통사론, 형태론

키워드 : 문법연구동향, 문법연구감소, 코퍼스/기술적연구 증가, 다양화/다각화, 유형론적 대조연구

■ 정상철 (鄭相哲)

한국외국어대학교 교수

jung1024@hufs.ac.kr